2024年7月　園長だより

2024年7月19日(金)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「隣人を自分のように愛しなさい」
(新約聖書　マルコによる福音書12章31節・・・7月の聖句より)

牧師になって、10年くらい。いったい、何回「愛」を囁い・・・、語ったことか。多分、牧師ほど「愛」という言葉を連発している人間はいないと思います。今回の園長だよりにしても、何個「愛」と書かれているのか（文字カウントしたら31個でした）。一方で、それだけ牧師は「愛」という言葉に親しんでいるのだから、さぞかしパートナーに対しても「愛」に溢れた言葉掛けをしているのだろう、と思いきや。「仕事を家には持ち込まないタイプ」とか、「家で商売道具を出したりしない」とか妙な言い訳をして、はぐらかし、牧師のパートナーは腑に落ちない思いを抱えている、という説があったり、無かったり。説教では雄弁に「愛」を語り、その大切さを熱烈に伝えることはあっても、家庭では内気でシャイなのが牧師という生き物だと言えます。(もちろん、中には情熱的な牧師もいるかも知れませんが)。

「愛」とは、キリスト教の代名詞のようなものです。それだけ「愛」を強調するから、キリスト教が社会に浸透した側面もあり(結婚式におけるキリスト教様式の普及とか)、かたや、その「愛」のゴリ押しからキリスト教が嫌厭されている様でもあり(「愛し合いなさい」と命令されるのはキツイとか)。なかなか、キリスト教が伝える「愛」を評価・整理するのは難しいです。「神は愛です」とまで臆面なく言い放つキリスト教の「愛」に対する考え方は、実のところ、あまりの深淵さに牧師でも掴みきれていない部分があります。「好き」や「慕う」という言葉では代替できず、必ずしも「喜び」や「親しみ」が伴うものわけでもない。そこには、「敵を許す」とか「友のために死ぬ」などの厳しさがあり、「自己犠牲」を求める精神があります。キリスト教の「愛」を突き詰めていくと、だんだん嬉しさが減っていくような、そんな感じがします。

しかし、イエス様は、そんな風に土壺に嵌りゆく「愛」の探究者たちに対して、この7月の聖句を送りました。「まぁ、そんな難しいことを考えなくても、相手を自分と同じように愛せば良いんだよ」と。この教えについて、イエス様は、当たり前過ぎて言及すらしていませんが、大前提となっているのは「私は大事。私は愛されるに相応しい」という自己肯定感です。「自分のように愛する」わけですから、まずは、自分を愛してあげないといけない。まずは、頑張っている自分を褒めて認めてあげないといけない。そして、その上で「隣人を愛する」ということです。

これは、結婚式でもお話ししていることですが、「愛」とは単に「人を好きになる」ということではありません。「愛」とは、自分の中に芽生えるものではなくて、私とあなたの間に芽生えるものです。「好き」や「恋」は個人の持ち物ですが、「愛」は2人の持ち物です。「愛」って私とあなたの間にあるくらいが丁度いいんです。自分ばっかり我慢するのも良くないし、相手にばかり求めるのも良くない。掛け替えのない自分を愛し、自分のご機嫌も取りつつ、同じように掛け替えのないあなたの幸せを願い、ご機嫌にしてあげる。それが「隣人を自分のように愛しなさい」という御言葉の真意かと思います。結婚に限らず、全ての人間関係において、ですね。

夏休みが始まります。愛するご家族が、お互いに配慮し、労い合い、心穏やかに楽しい夏の日々を過ごせるようお祈り致します。旅行などのイベントの際は、ぜひ準備は分担して、子ども達にもしっかり手伝ってもらって、お互いに感謝し合えるような機会になればいいですね。たとえ雨天荒天に泣かされても、一緒に準備できて「ありがとう」を伝え合えたら、それは、それで良い想い出と言えないでしょうか。隣人を自分のように愛して、みんなが幸せになれる、そんな夏休みとなりますように。敦賀教会幼稚園では、夏休みの間、この1学期に頂いた皆様からの沢山の幼稚園愛に感謝しつつ、子ども達への愛をもって、2学期に向け十分に備えて参ります。